

特集

緑内障の臨床検査：最新情報

序 論

福地健郎*

本号の特集は「緑内障の臨床検査：最新情報」です。近年の緑内障診療では、1980年代後半の静的自動視野計の登場や2000年代に入ってから光干渉断層計(OCT)の普及のような極めてインパクトのあるbreak throughはないように思います。その反面、それぞれの検査について経験と情報が集積し、次第に洗練され、より精度が高くなってきています。この特集では緑内障検査のルーチンである眼圧、視野、OCTについて、特にOCTについては前眼部、後眼部、OCTアンギオグラフィ(OCTA)の3つのパートに分けて、計5名の先生に、それぞれの最新情報について概説していただきました。

生杉先生には、眼圧について、従来の測定方法をおさらいし、さらに近年注目されているHome tonometerを紹介していただきました。眼圧の自己測定には、緑内障治療のターゲットである自己の眼圧を知る、関心を持つという側面があり、アドヒアランスの改善といった付随的效果も期待できると思います。庄司先生には視野について、新しい測定装置と測定アルゴリズムについて解説していただきました。特にヘッドマウント型視野計では従来の片眼ごとの測定モードに加えて、両眼開放で同時に測定するモードを搭載しています。両眼開放視野といった従来の方法では

からなかった視野の現象を知るきっかけになりました。藤原先生には、前眼部OCTについて、原発閉塞隅角病、続発緑内障の診断、鑑別診断とともに、緑内障手術後の解析と治療方針の決定といったもう一步踏み込んだ応用について解説していただきました。後眼部OCTは緑内障診断における標準検査のひとつであり、今回はこのテーマに関するエキスパートである金森先生に、より診療的な立場で解説していただきました。OCTは早期診断と早期観察に重要なツールですが、やはり機械による測定であり、測定の条件によってさまざまなアーチファクトを生じます。使用する私たちがその利点、欠点を良く理解して、より精度の高い使用を心がけたいところです。最後にOCTAの現状について冨田先生にまとめていただきました。OCTAが登場して10年以上が経過しました。多くの関連した研究によって緑内障に関わるさまざまな血管変化について明らかにされてきましたが、OCTAは緑内障臨床におけるルーチン検査には至っていません。ここでは現状とともに今後の展望について述べていただきました。

本号の特集をお読みいただいた読者の皆様には、緑内障患者さんのより良いQOLのために、緑内障の臨床検査の現在を知り、より精度の高い、より質の高い診療の一助にいただければと思います。

*Takeo Fukuchi 恒仁会・新潟南病院眼科(新潟県)/新潟大学大学院医歯学総合研究科眼科学分野